

神の微笑

芹沢光治良

新潮社

かみ ほほ えみ
神の微笑

昭和61年7月20日 発行

昭和61年8月20日 2刷

定価 1300 円

著 者 せり ぎわ こう じ りう
芹沢光治良

発行者 佐藤亮一

発行所 株式 新潮社
会社

郵便番号 162

東京都新宿区矢来町71

振替東京4-808

ISBN4-10-311327-8 C 0093

印刷・二光印刷株式会社 製本・大口製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Kojiro Serizawa 1986 Printed in Japan

神

の

微笑

ほほえみ

第一章

「文学は

物言わぬ 神の意思に 言葉を

与えることである——」

あれは昭和四十五年の六月のことだった。心友の岡野君が、故郷の海浜の松林に、僕の名を冠した立派な文学館を建設した。その後間もなく、文学館で、僕に関する五葉の絵ハガキをつくって、一組にして参館者に配付した。その一葉に、当時の僕の写真の下に、巻頭の詞を添えた絵ハガキがあった。

初めてこれを見た時、当惑のあまり、あらかじ予め相談してくれたら、これだけは賛成しなかったのにと、思ったが。

気恥ずかしくもあったが、そればかりではない。その詞が僕の文学の本質を表わしているよう

で、一体、長い作家生活の間に、どこでこの詞を書いたか、どう考えても、思い出せなかった。誰かに頼まれた色紙に、うっかり気安く書くような詞ではないがと、想いにふけていると、こんな場合よく現れる森次郎が、突然話しかけた。

——気にしないで……それ、きつと岡野氏が君の文学精神を全作品から要約した詞だよ。さすがに岡野氏の名文句だと感心したくらいだからな。

——岡野さんは誠実で、しかも聡明で、気配りする仁だから、ご自分で考えた詞を黙ってこのように使う人ではないよ。例えば、この絵ハガキの表を見給え。郵便はがきという文字の左横に、丸に桔梗の紋章があるだろう。それをつけるにも、僕の家の紋どころを選ぶがいいかと、ちゃんと話したからね。

——それなら、君は忘れたろうが、どこかに書いた詞だよ。暇になったら旧作を読んで見給え、必ず発見するさ……しかし、君はこの詞のような確信をもって創作しているんだらう？

——とんでもない。ただ書きたいことを書いてるに過ぎないんだ。

——それなら是非一度、わが文学精神を考えてみるんだな。前の詞を探す機会に……

その頃、僕は文学精神について考えるどころか、あふれる泉をくむように汲々と創作に専心していて、その詞を気にする暇もなく、いつか忘れてしまった。その間に、文学館の方では、友の会が組織されて、読者である会員が月に何回か集って研究会を開くようになり、僕も乞われて年二回、春と秋、必ずその会のために沼津へ出掛けることになった。

集るのは、遠く青森から九州まで、各地から老若男女、さまざまな読者が、少ない時でも三十名、

時には百名以上も集つて、文学館の一階の広間に用意した簡易椅子で足りなくて、立っている者もある。僕は東京から娘の車で出掛けて、午後一時から二時間ばかり文学漫談をして、質問を受けてから、会員のなかにはいつて直接対話して、四時過ぎに東京へ引きあげるならわしである。たしか昭和五十年か、五十一年の秋の友の会の時であつた。文学漫談を終えて質問の時になると、老紳士が立ち上つて言つた。

——先生、お作を全部読んでおりますが、或る場所で、文学とは、物言わぬ神の意思に、言葉を与えることだと、書いてありますが、他の場所には、文学とは、神の無言の要求に、一つの言葉を与えることだと、書いています。その何れが正しいのでしょうか。双方とも正しいとしたら、先生はどちらがお好きですか、と。

不意にお面めんをなぐられた気がしたが、絵ハガキを初めて見た日のことを思い出して、この紳士が僕に代つて、僕の文章から探し出してくれたように安堵した。それ故、双方とも正しいですとすぐに答えられた。二つの詞のうちどちらが好きかについては、好き嫌いはないが、後の方は、神の無言の要求に、というのを、無言の神の要求にと、書きかえたいと、話した。

——先生、この詞は先生の文学精神を表現した象徴的な詩句ですね。私はこれにぶつかった時、思わず唸うなり声をあげて、心から合点しました。それで、先生にお願いですが、先生、神について、いつかお話をいただけませんか。

——わかりました。私はこの友の会では、政治と宗教に関しては、触れてはならないと、自戒してありますが……会員にはいろいろ政治に関係のおありの方もあろうし、又、いろいろ異つた信

仰をお持ちの方もありませんから……しかし、私は何教も、宗教を信じていないが、かと言って、神の存在を否定しないから、難しいことだけれど、信仰の問題でなくて、その私の神について、お望みならば、いつかゆつくり話しましょう。

——お願いします。その神について伺えば、先生の文学の奥義にふれることになりますから、是非お願いします。

実は四年ぶりに原稿用紙に向って、創作にかかったが、ここまで書いて、筆が止ってしまった。この三年間に、妻を癌で失ってから、その悲しみや日常生活の不自由などから、規則正しかった生活の秩序が崩れたためか、体調が狂うとともに、腰痛にかかって、動作も不便になり、折角二百枚ばかり書きあげた創作も中止したものだ。肉体が弱ると精神も衰えて、自然にわが年齢を数えあげては、死の近いのを痛感して、亡妻のもとにゆつくり眠りたいと、ふと考えるようになった。勿論、医者にもかかり、人にすすめられて鍼や灸の治療も受けたが、老体に力をよみがえらせることはできなかった。死を準備しなければならぬのだと自覚した。一日を生涯として生きた自分には、今更死の準備もないのだが、五十年間書いたわが作品を整理して、死後にのこすべきものを選び、他は抹殺しなければと、気がついたのだった。

僕は元来作品を発表した瞬間に、それは公のものになったとして、再読しなかった。再読する時間があれば、他の書物を読むのに費やしたものだ。それ故、どれほど書いたか、はつきり記憶

がなかった。今まで選集を三回出したが、その場合も、出版社が作品を選んだので、僕は読みもしなかった。しかし、死後、全集を出版してくれる出版社があった場合、それには自らよしとする作品だけを採用してもらわなければならない。それが、死後なお生きるということだろうと想った。

そんなつもりで、先ず短篇小説からかかった。短篇集を出版した時に採用したのもあった。雑誌に発表した時に切り抜いたままのものもあった。僕が古い作品を読んでいることを知って、熱心な読者が、敗戦後の混乱時代に、粗悪な仙花紙の雑誌に、僕の短篇小説が掲載しているからとて、何篇も届けてくれた。全部で三百篇もあったろうが、それ等を時をへだてて読んでみると、他人の作品を読むように、正確に良否が判明した。悪い作品には、抹消すべきものと、しるしをつけるだけだが、遺すべき作品と考えたものには、訂正や加筆をして、創作の時とちがった楽しい仕事であった。時には、それを書いた記憶のない作品にも出あった。いつ、どんな動機で書いたか、想起しようと、一心に考えたこともある。

これ等の短篇小説のなかには、自分の作品と思えないほどの傑作が何篇かあった。書いた記憶もないが、また、とても自分には書けそうもない、素晴らしい作品があった。そんな作品を発見すると、一読茫然として、これこそ自分の作ではなく、神にでも書かされたものかと、二度も三度も繰り返し読んで、訂正も加筆もできなかった。そればかりか、パリの出版社に短篇小説の翻訳を求められた時、何故、こんな短篇のあることを思い出さなかったか、臍はらをかむ思いがしたものだ。

この作業は、衰弱した老体には、長い重荷であったが、しかしこころを若返らせ、精神を死から遠ざけてくれた。短篇が終ると、すぐに長篇小説にかかった――

長篇小説の再読は短篇小説の場合のような意外な発見も喜びも、残念なことになかった。作品の良否は、四分の一も目をとおせば判明した。遺すべき作品の方は改めて精読したが、訂正加筆は困難で、僅かに用語をなおす程度にとどめたものの、どの作品も、創作動機や時代背景など、鮮明に思い出されて、いろいろ考えさせられたものだ。そして、この作業をはじめて四年たつて、その夏――昭和六十年の夏、例年のように中軽井沢の丘の家で過すことにして、出発にあたって、大河小説『人間の運命』の十二巻を読み終つて、のこりの二巻を持つて行つたものだ。

この大作は、私と同年で境遇や人生体験のよく似た森次郎君を重要な主人公に選んでゐるためか、そこまで再読しただけで、自分の一生を再経験するような苦悩と感動をおぼえたが、同時に、現代の政治に関する危機感に襲われて、慄然としたものだ。

日本人はたしかに敗戦後の不幸を克服して、経済的に豊かになつたが、金と私欲に走つて、人心が荒廃したために、民主主義に生きると自ら信じながら、指導力のありそうな政治家に、うっかり動かされる傾向がある。例えば旧海軍出の首相が、旧制高校生の弁論部の委員のような弁舌に、国家主義的野望を包んで、政策を披瀝し論ずることに、感覚的に魅了されて、うかうか首相の讚美者になつてゐる。そして、自ら民主主義者だ、平和主義者だ、戦争反対だと、口にするものの、気がついた時には、森次郎の同時代の人々と同様に、驚くべきことに、国家主義的戦争に進んで与つていたというようなことに、なりはしないか。怖ろしいことだ。そればかりではない。

現に米ソ二大強国が、たがいに巨大な核兵器を保有しながら、新兵器の開発と軍備に、巨額の国家予算を投じて競争しているばかりでなく、世界の文明国を二分して、たがいの陣営に組み入れているが、わが国はアメリカの同盟国であり、両陣営で万一戦争の起きるような場合、日本は平和主義だ、戦争反対だと、どんなに叫んだとて、相手にするものはなく、直ぐに核兵器に見舞われるだろうが、その結果、日本と日本人がどうなるか。誰も知悉ちしつしていることだが……

ただ、人間は呑気で、そんなことは起きるものかと、わけもなく樂觀しているのか。僕は老齢で、衰弱しているから、そんなことの起きる前にこの世を去っているだろうからと、必死に不安をおさえるものの、中軽井沢へ発つ頃の日誌には、愚かにも、稚拙な和歌をうつしたくらいだ。

幼児わまたごの遊ぶを見れば悲しかり

いかなる世をば汝は生きるらん

それも、僕が健康が衰えて気弱になっていたからか。その証拠には、昭和五年以来、海外旅行中でなければ毎夏過した中軽井沢へ、赴く気にならなかつた。動くのが大儀だった。結核でスイスの高原療養所を退院して日本へ帰る許可を得た時、主治医は、十年間、夏の二カ月間海から離れた標高千米メートル以上の高原で過す条件をつけたものだ。それを実行するために中軽井沢を選んで、その間忠実に自然療養したおかげで、不治だと考えられた結核もなおり、その後夏になると家族の夏休みを待ちかねて、ともに出掛けたものだ。

それを、今年留守番を探すのも面倒だし、冷房もあることだから、山の家には行かないと、唯二人で暮している娘に伝えた。娘は教師をしている大学が休暇になるなり、留守番を探して来

て、自分独りでも高原で休養するからと主張して、わりやり彼女の車に乗せて山の家へ僕を運んだものだった……

——やはり空気がさわやかね、樹木の緑がこんなにあざやかだとは、忘れていたわ……と、娘は喜びの声を挙げて、一年ぶりに開けた家のなかを、活潑に駆け廻るような調子で掃除や蒲団乾しにかかった。やむなく僕は寝椅子を森のなかに運び出し、それに仰臥ぎようがしてすぐに森林浴をはじめた。

たしかに空気は緑に澄んで胸を洗って、全身にしみわたるが、半世紀前に僕が植えた楓かえでの樹々がすっかり壮年になって、頑張って地表にまで根を張り、おのおの声をかけて、僕を激励するのだ……

その樹々の語る言葉がわかったのは、まだ数年前のことだが、おやじさんとか、先生とか呼んで、今年もお会いできました、よかった。この根を見て下さい。こんなに自分達も頑張っているのだから、先生も頑張ってくださいよ。山で一緒にいい空気を浴びて、体も心も若くして下さいよ……

初めてこんな声をかけられた時には、どきもをぬかれたが、同時に目頭が熱くなったものだ。それを機会に、僕はわが育てた樹々と話ができることを発見して、人生に喜びが一つ増したように秘かに思った。そして、毎年高原の家に着くなり、樹々に話しかけてみて、あの時だけの錯覚でないことをたしかめた。一体これはどうしたわけか。わが育てた樹々の他の木は、話しかけても答がない。してみると、心をかけて育てること、それは樹々であっても、愛するということで

あろうか。愛は奇蹟をうむというが、樹々との会話も愛の奇蹟であったかと、僕は目も耳も洗われた思いがした——

そんなわけで、今度も二、三日仰臥椅子で森林浴をしながら、樹々の励ましを受けているうちに、肉体にも精神にも精気がみちて、元気になった。「人間の運命」の最後の二巻も苦もなく再読訂正を終って、これでよしと、息をつきながら、三年以上諦めてしまった創作をはじめなければと、思い立ったのだ。旧作では、随想集が全部で八巻あるが、これ等を再読訂正するほど元氣を取り戻すまいと考えて、持参しなかったことを後悔した。運よく、五年前に持参した原稿用紙が、使われないまま戸棚の隅に残っていた。それをとり出して、四年ぶりに原稿用紙に向ったのだ。

ところが、十枚ばかり書いたところで、突然ペンがとまって、どうしても進まない。ああ、神についてこの人と語るべきだった——と、その死が胸にせまったからだ。

あの老紳士が文学館の友の会で質問をした時には、会場で幾度も顔をあわせたが、紳士がどういう人か、名前さえ知らなかった。同じ年の春頃から、東京附近に住む熱心な読者が、文学愛好会と称する会を組織して、月に一回、日曜日に中野区の文化センターに集って、午後一時から五時まで僕の文学について語りあっていた。会場が家から歩いて十五分ぐらいの処であるから、時僕も散歩の帰りに三時半頃立ち寄ってみた。

いつも三、四十人集って、実に真面目な、いい会であった。会員には一流会社の社長、自営の

小企業主、若い公務員、高校の先生、街の商店の主人、大学出の評論家志望者、東大の大学院で研究中の数学者、女流歌人、主婦、男女の大学生等、いろいろで、立ち寄る度に、会員の話に啓発されたが、いつも最後には僕に質問があつて、感想を述べたものだ。会を重ねるうちに、会員と親しくなり、名前はもちろん、そのお人柄や職業なども、自然にわかつて、いつか僕自身、その会合を楽しむようになったが、或る時、あの質問した老紳士が、その会合に出席した。

それで、紳士が高級公務員を定年退職して、平和な住き晩年を小田原で過しているS氏だと、知つた。氏は趣味や娯楽がない代りに、若い頃から好きだった読書をゆつくりたのしむ時間があることと、国鉄からもらった永久二等バスを利用して、好きな時に日本中旅行できることが、幸せだと話していた。いつ頃からか、愛好会への出席前に、必ず手土産をもって僕の家へ立ち寄つて、半時間ぐらい静かに話して行く習慣になつた。その話も、一カ月間にした読書や旅行についての感想を真面目に報告するかのように述べるのだが、聞いていて楽しかった。その手土産がきまつて千疋屋のメロンで、二人きりの家族では、好きなメロンも二、三日つづけて味うと、閉口したが、季節を外れた頃のメロンは高価であろうし、もう手土産など心を使わないようにと、話すつもりで出迎えても、その言葉をかけることをおさえる律義さに打たれて、いつも果せなかつた。

そのうちに、日本中をすべて旅行してしまつたのか、年に二回ぐらい海外旅行に出掛けられた。言葉ができないから団体旅行に加わるのだと言つていたが、ヨーロッパに見ることがなくなつたからとて、中国への旅をはじめた。海外旅行から帰つてから訪ねてくれる時には、いつも見聞談

をするのだが、僕自身その地に旅した印象を残すように、心を使われた。

団体旅行はらくだと言うものの、年に二回もでは、七十歳を越した肉体には無理ではなからうかと懸念して、海外旅行は年一回にしたらと、軽く勧告したこともあるが、——もう老齡としですし、躰が動く間にしておかなければ、やがて後悔しますからと、笑っていた。僕が妻を見送った翌年の秋、訪ねてくれた頃には、歩いて十五分ぐらいの愛好会に行くのにも、娘に自動車で送らせるほど衰弱したせいか、間もなくマレーシアに旅行するという氏が、何となく弱られたように感じられて、思わず言葉が出てしまった。

——ね、お躰に無理ではありませんか。今度は太平洋戦争中に公務で出張して偶然に戦争にまきこまれて苦闘した詳しい土地だし、単独旅行で気がらくだと言っても、心配ですな。長い間の疲労がたまっていますか。休養なすって、その間、わが歩いた人生について、子供や孫に書いておくのも愉しくはありませんか。

——え、今度は家内も心配するので、これが最後の海外旅行だと思っていますし、三日後に健康診断してから、決行するつもりです。ですから、先生もご安心下さい、と答えた。

お帰りの時、いつものように玄関に送って出たところ、別れの挨拶をして、突然、——先生、握手して下さい、と言った。そんなことを言ったことがないから吃驚びっくりして、右手を出したが、その掌は冷たく、顔色も冴さえないように思われて、その後姿を門外に消えるまで見送った。

それから二週間もしないで突然、S氏の死の電報を夫人から受けとった。信じられなかった。愛好会の幹部に娘が連絡して、死を確かめてから葬儀に参列したが、あの三日目に健康診断で入

院した病院で、癌を発見して、直ぐに手術したが、助からなかったとのことだった。

今もその死が、僕には信じられない。それも、あの質問に答えないで、彼岸に見送ってしまったからか。愛好会に出席する前に立ち寄られたのは、五十回近いが、あの答を何気なく僕からきけるものと期待したからではなからうか。海外旅行も年とると、文化や美術や建築などに興味もなく、ただ異った風景のなかを旅して、そこに住む人々の生いきさま態をぼんやり眺めるぐらいで、結構いのちの洗濯になるというのが、その持論のようだったが、フランスの旅から帰った時、めずらしく話したことがある。

——今度はパリでノートルダム寺院に案内されましたね。西欧諸国には何どこ処にも古い立派な教会があるが、あれはルネッサンス以前の信仰の象徴で、今でも古い建築記念物だと思って、何処でもバスのなかから眺めるだけでしたが、今度の団体旅行では、スケジュールの関係か、有名なノートルダム寺院前で、バスから降ろされて、ゆっくり寺院のなかへ案内されて……驚きましたね。荘厳な建物のことはバスからもわかったが、内部にはいると、暗くて広い会堂のあちこちに、敬虔しんけんに跪ひざまずいて祈っている人々があつて、胸をつかれました。フランス人は革命の時に宗教から解放されたものと、思っていましたから……先生、今日のフランス人は、どう神を考えているのでしょうか？

その問いを、僕は真剣に受けとらなかつた。とうに愛好会の会議がはじまっている時間であると考えて、氏の問いかげの目的に気付かなかつた。遠慮がちな氏が、僕の神についての考えを、そんな風にして、引出そうとしたのであろうに——気の毒なことをした。氏にとっては、僕に生